

多文化間アドバイジング・カウンセリングの深化と発展 ～多様な学生たちの活躍に向けて～

国際教育交流センターアドバイジング部門

アドバイジング・カウンセリング室

田中 京子・高木 ひとみ
酒井 崇・和田 尚子

ソーシャルサービス室

大井 砂貴子

1. はじめに

国際機構が設立されてから1年間強、アドバイジング部門は、国際学生を対象としたアドバイジング・カウンセリング、キャリア支援、適応支援、多文化理解促進等のミッションを持ち、教育と研究、環境調整等を通して活動を発展させてきた。アドバイザー、カウンセラー、精神科医、キャリアカウンセラーなど、教員それぞれが異なる専門性を持って貢献し、有能な職員・事務補佐員たちの連携協力を得ながら、2度にわたって行われた組織改編を乗り越えて進むことができた。後期には事務補佐員の一部が勤務時間を増やして部門内業務を補完したり、勤務場所を変えて本部門と学生総合相談センターの両組織に関連する業務を担当したりして、度重なる環境の変化に最適な方法で対応し、部門内外の連携体制を強化することができた。

留学プログラムの種類や留学生数が増加し、学生たちの研究や仕事、生活の舞台が世界に広がっている中で、移動・環境変化に伴う個人や組織、社会の課題は、より多く、また多様になってきている。継続すべきことは改善しながら地道に行い、新たな試みも加えながら活動を展開した1年であった。

2. 教育活動

(1) オリエンテーション：情報提供、信頼関係の構築、交流・多文化理解の促進

留学生の渡日前から修了後にいたるまでの参加型、交流型、日本語・英語併用オリエンテーションを継続・充実させた。

【渡日前オリエンテーション】

・（日本語研修生、日本語・日本文化研修生対象）

例年と同様、学生交流課および入学予定者の進学先部局担当者と協力し、ウェブ上で渡日前情報、入学予定者のためのガイドブックを得てもらおうよう案内した。

【到着後オリエンテーション】

・全学新入留学生オリエンテーション

春と秋の新学期に、学生支援課および国際教育交流センター・国際言語センター関連部門と協力して、オリエンテーションを行った。秋学期は、G30プログラム学生も対象として行った。今年度は情報の整理と提供方法の見直しを行い、新入留学生には情報をひとつのファイルにまとめて渡す方法を採用した。

・日本語研修生、日本語・日本文化研修生対象オリエンテーション

研修生の所属は国際言語センターであるが、到着後の区役所登録、学生登録、オリエンテーションをこれまでと同様に4月と9、10月に数回に分けて行った。

・国際交流会館オリエンテーション

新学期にはそれぞれの会館で、チューターが主催して新入居者に対するオリエンテーションを行っており、アドバイジング部門教員はそこに参加し挨拶等を行った。

【交流型オリエンテーション（ワークショップ）】

例年通り、世界の言語、文化を学ぶワークショップを地域のボランティア講師および名古屋大学学生グループの協力のもと行った（本年報「事業報告」中の

「国際的人材育成のための多言語・多文化理解ワークショップの展開」を参照)。日本文化紹介のセッションは、基礎セミナーと連携開催し、ケンブリッジ大学から本学に来た6名の短期交換留学生の参加も得て行った。

【引越しオリエンテーション】

国際交流会館を退去して民間アパートなどに引っ越す必要がある留学生たちを対象に、宿舎の選択肢やそれぞれの探し方などを説明するオリエンテーションを、教育交流部門と協力して各学期開催した。参加者には、昨年度の事業として作成した引越しに関する映像を予め見てくるように伝えた。

【帰国前オリエンテーション】

・(日本語・日本文化研修生対象)

学生交流課と協力し、プログラムを終えて7月に帰国する研修生に、帰国のための各機関での事務手続きや、帰国後の過ごし方などについて、オリエンテーションを行った。

(2) 国際教育交流プログラム

【学生パートナーシッププログラム】

国際交流を希望する学生の登録により、一般学生と留学生を1対1で紹介し自由に交流する「きっかけ」を提供するものとしている(今年度の登録者数は一般学生18名(内新規6名)、留学生3名(内新規3名))。登録時の面談による聞き取りにおいて、一般学生は交流目的として語学習得の希望が多く、留学生の使用可能言語や交流目的の相違からマッチングによる紹介は行わなかった。語学習得を望む学生には、名古屋大学留学生会が提供する語学交流プログラム「TANDEM」などを紹介するとともに、すべての登録者には学内外の交流イベント、海外留学に関する情報、国際言語センター生へのチューター募集の情報をメールにて提供した。

【スモールワールド・コーヒーアワー】

2016年度は、スモールワールド・コーヒーアワー(以下、コーヒーアワー)は、運営に携わっている学生メンバー10名たちが、「アットホームな雰囲気を大事に楽しく発展すること」を目標に掲げて活動を進めた。通常、前期3回、後期3回、計6回のコーヒーア

ワーを開催している。さらに、後で記述する「プレゼンテーションアワー 世界が広がる20秒」のイベントをコーヒーアワーの特別企画として位置づけ、プレゼンテーションアワー実行委員メンバーと共同で開催した。

2016年度スモールワールド・コーヒーアワー活動

開催月	テーマ	参加人数
4月	うそつき自己紹介	約40人
5月	書道・カルタ	約40人
6月	ワールドカフェ：異文化体験	約50人
7月	プレゼンテーションアワー	約50人
10月	自己紹介ビンゴ	約50人
12月	プレゼンテーションアワー	約50人
12月	ワールドカフェ：冬	約30人
1月	折り紙・カルタ・映画	約20人
	計	約330人

コーヒーアワーのイベントは、学生スタッフが各回につき、毎週1～2回のミーティングを重ねて企画運営をしている。どのようなアクティビティや活動を導入すると参加者が参加しやすく、有意義な交流を促すことができるのか、多文化への理解を深める視点も考慮しながら企画を行った。今年度はワールドカフェ形式を用いて、「異文化体験」「冬」をテーマに参加者間の対話が促されるよう新しい取組みも取り入れ、多くの参加者を募ることができた。

コーヒーアワーのイベント中に見られる効果もさることながら、企画運営活動を通じた学生の人材育成という側面も持っており、学生たちの力を発揮する場や成長の場を提供している。

【世界が広がる20秒～プレゼンテーション・アワー～】

学生のプレゼンテーション能力を高め、アカデミックな交流の場を創出することを目的に、2016年7月、12月に、グローバルプレゼンテーション大会「世界が広がる20秒～プレゼンテーションアワー～」を開催した。コーヒーアワー特別企画と位置づけ、学生15名による実行委員会を作り、準備、運営を進めた。

今年度も多様なテーマによる発表が行われた。例えば、アメリカでの留学体験、ものづくり、異文化に適應する方法、異文化間コミュニケーション、フードコミュニケーション、マスコットと大学愛、ラオスでの

異文化体験、農業サークル活動、記憶と学習の関係、ディベートについて等である。発表者が発表しやすくなるよう、実行委員のメンバーが各発表者のメンターとなり、連絡を取り合いながら、打ち合わせやリハーサルを実施した。リハーサルでは、発表がより理解しやすい内容になるようコメントし、発表者たちの緊張を低減するよう工夫を図った。

本プログラムでは、発表者が自分の研究、興味、活動等を発信し、聴衆者が発表を聞くことによって、視野や世界観を広げていくことを目的にしているが、それと同時に、企画・運営を進める実行委員の学生メンバーがプログラムのコーディネーション力を高める場としての教育的な機能を持っており、関わる多くの学生たちが能力を発揮し、自己成長を促す契機を提供している。

【多文化間ディスカッショングループ】

学生の適応援助、多文化理解の促進、そして多文化間における友人関係の構築を目的とした多文化間ディスカッショングループを前期に2グループ（日本語を主に使用）、後期に2グループ（英語を主に使用）開催した。幅広い学生たちが参加し、国籍や文化背景、年齢や専門分野を超えて、互いに学び合う場面が多く見られた。他学生や先輩と繋がることができ、学生生活を送る上で、多様な情報を得られる機会となっていた。さらに日常の学業や研究生活から離れ、ストレスを低減させ、リラックスできるような場となっているようであった。両グループとも、使用する言語（日本語、英語）を学びたい、練習したいと希望する学生たち

も多く、言語を学びながら、ディスカッションに取り組み、コミュニケーションを取ろうと試みていた。言語面で分かりにくいところは、他の言語を用いてサポートしあった。各グループに、学生ファシリテーターを1名配置し、学生が企画・運営に携わることによって、ファシリテーションやコーディネーションの力量を形成するプログラムとして機能するよう実施した。

<参加学生の感想（2016年度後期グループ参加者）>

- ・ 楽しかったです。自分と異なる背景を持つ人が集まって、異なる経験や意見が聞けて面白かったです。ちゃんと意見を言う、意見を聞く、ということをしてみるとディスカッショングループ以外の場でも人の話を真摯に聞こうと思いました。
- ・ いろいろなトピックに関して様々な視点からの考えが聞けて良かった。もっと細かくわかりやすく英語で説明できるようにしたい。
- ・ いろいろな国の文化等について知ることができ、よかった。個人的な反省としては話の内容を理解できない部分もあったので、聞き返したりすればよかった。
- ・ It was a good experience to discuss about various topics on culture. I get to know many things I didn't know about Japan.
- ・ 実際、友達とかとでも、設定されないと話さない話題もあったので、楽しかったです。同世代の人と話すことで、国による違いや、地域による違い（日本国内でも）も見えてきたのが面白かった。
- ・ 居心地の良い、話したくなる雰囲気のある場所を作っ

2016年度多文化間ディスカッショングループ

2016年度前期	
日本語グループ	①2016年5月19日～7月14日 毎週木曜日4限（全8回） 参加人数：7名 ファシリテーター2名（教員1名、学生1名） ②2016年5月20日～7月15日 毎週金曜日4限（全8回） 参加人数：8名 ファシリテーター：3名（教員2名、学生1名） 主なテーマ：食べ物、習慣、文化の違い、夢、夏の予定、人間関係、恋愛、LGBT、コミュニケーション等
2016年度後期	
英語グループ	①2016年11月10日～2017年1月12日 毎週木曜日4限（全8回） 参加人数：9名 ファシリテーター2名（教員1名、学生1名） ②2016年11月4日～2017年1月13日 毎週金曜日4限（全8回） 参加人数：8名 ファシリテーター3名（教員2名、学生1名） 主なテーマ：祭り、食べ物、名古屋、旅行、コミュニケーション、言語学習、夢、趣味、大学の仕組み、働くこと・就職活動について、留学、海外に住みたいか、SNS、冬休みの予定等

てくださってありがとうございました。楽しかったです。言語能力も上がったと思っています。

・ 落ち着いた雰囲気の中で話すことができ、初めて会った人たちとも仲良くなれて良い経験でした。言語を練習する機会が増えてありがたかったです。

【Inspire Together：グローバルピアサポーターのためのリーダーシップ研修】

名古屋大学同窓会支援事業を受け、名古屋大学で学ぶ学生が、在学中に大学の国際化への貢献に主体的に関わり、卒業後も国際社会において指導的な役割を果たす人材として活躍するために必要な能力（特に多文化理解能力、多文化間コミュニケーション能力、リーダーシップ能力、コーディネーション能力）を育成することを目的とした、1泊2日の合宿形式の研修を開催した。今回の合宿は立命館大学いばらきキャンパスのセミナーハウスにて、立命館大学と名古屋大学が共催で行い、学生オーガナイザー9名が中心となってセッションを企画した。参加者は、国際交流活動に携わり、関心を持っている学生たちが34名参加した（名古屋大学15名、立命館大学19名）。合宿では、日・英両言語を使用言語とした。初日は、アイスブレイクゲームを行った後、学生たちが互いの大学における取組みについて情報交換を行い、国際交流活動に携わる際の課題やニーズ（「Communication & Language」「“Breaking the Invisible Wall” between International & Japanese Students」「International Students’ Needs」「Organization and Teamwork」）についてディスカッションを深めた。2日目は、各々の強みを活かしたリーダーシップスタイルについて検討した。さらに学生時代に国際交流活動に携わり、社会において活躍している卒業生たちを招き、学生時代の

国際交流活動が卒業後にどのように活かせるか、卒業生たちの話を聞きながら検討した。2日間の合宿を通して、参加学生たちは国際交流に携わることの価値について再確認し、自分たちの強みを活かした活動や関わり方について検討でき、充実した時間を過ごした様子が伺えた。本研修の詳しい報告については、事業報告を参照されたい。

【名古屋大学グローバルネットワーク(国際交流グループ) 活動報告】

名古屋大学グローバルネットワークとは、国際教育交流センターが顧問や支援をする国際交流グループの連携を促すことを目的に2009年から存在している学内ネットワークである。現在は、7グループ（スモールワールド・コーヒアワー、プレゼンテーションアワー、ヘルプデスク、留学のとびら、English College、異文化交流サークル ACE、名古屋大学留学生会 NUFSA）が共同で活動報告書を作成している。

年度末には、国際プログラム部門の楠元特任講師を中心に、共同で年間活動の報告書を発行した。報告書は、アドバイジング部門のホームページを参照されたい。（<http://acs.iee.nagoya-u.ac.jp/program/introduction.html>）

名古屋大学グローバルネットワークの国際交流活動に、より多くの学生が参加できるようにアドバイジング部門が中心になってリーフレットを発行しており、オリエンテーション、ガイダンス、海外留学説明会等で配布している。

【学生組織との連携】

・ 異文化交流サークル ACE

異文化交流サークル ACE（Action group for Cross-

2016年度 Inspire Together グローバルピアサポーターのためのリーダーシップ研修

日時：平成29年3月3日（金）～3月4日（土） 会場：立命館大学いばらきキャンパス（大阪府いばらき市） 参加者：名古屋大学学生15名、立命館大学学生19名	
3月3日（金） セミナー1 セミナー2 セミナー3	アイスブレイク、ポスターセッション（各活動・団体紹介）【学生チーム】 Progressing Together（各活動・団体及びキャンパスの国際化における課題共有・討論）【学生チーム】 セルフ・リフレクション（モチベーション・グラフを使った振り返り）【学生チーム】
3月4日（土） セミナー4 セミナー5	リーダーシップ研修【堀江未来（立命館大学）、高木ひとみ（名古屋大学）】 卒業生セッション【卒業生チーム】

cultural Exchange) は様々なプログラムで名古屋大学に訪れる留学生の生活のサポートや留学生と一般学生の交流を促進するためのイベントの企画・運営を行う学生団体である。アドバイジング部門教員が顧問を担当し、活動の助言や、企画するイベントが多くに学生に周知されるよう情報提供に協力した。2016年度は、ACE と NUFSA が協働で開催している「留学生のためのバザー」をより良くするために学生たちが地域の方々と協力して知恵を出し合い、充実したバザーを展開した。

・名古屋大学留学生会 (NUFSA)

NUFSA では、全学の留学生を対象とした、春と秋の留学生のためのバザーやウェルカムパーティーの他、様々なイベントを行っている。NUFSA は名古屋大学留学生後援会から毎年補助金を得ており、名古屋大学の留学生にとって有益な活動が提供できるよう取り組んでいる。2016年度は「TANDEM (言語パートナー)」「CINEMA CLUB」といった新しい活動を充実させ、広報活動にも力を入れ、多くの留学生たちにとって身近な存在になれるよう活動の幅を広げている。2016年度は9月に国際担当理事と懇談する機会を設け、NUFSA の活動報告を行った後に、今後の活動の提案等について協議を行った。

・愛知留学生後援会

1960年代に設立した任意団体で、50年以上にわたって愛知県留学生会と連携し支援活動を行っている。本会の緊急援助金審査員および同援助金会計を2012年度から田中が担当し、急な経済的困難に陥った愛知県内の留学生への支援について、申請受け付け、審査、支給、会計を行っている。2016年度は合計9件の支給をしたほか、県内の50大学に制度についての案内を送付した。病気や事故による医療費や、一時的にアルバイトもできないことから生活費にも困窮するような留学生にとって、大きな支援になっている。

・中国留学生学友会

当会が主催または共催する行事等について、相談を受けたり大学との連携調整について協力したりした。また、当会が定期的に行う球技練習のための学内施設利用について、引き続き責任者として申請を承認している。

・名古屋大学イスラム文化会 (ICANU)

当会が主催する国・地域文化紹介行事や、イスラム文化紹介の行事について、また毎週金曜日に行う集団礼拝について、相談を受けたり大学との連携調整に協力したりした。政教分離の原則に則って信仰の自由を保障するような環境の整備が全国的にも話題になった。名古屋大学キャンパスマスタープラン2016でも多文化共生への対応や多目的室の設置は中期目標とされており、今後礼拝場所確保等検討したい。また今年度は、名古屋大学生協によるベジタリアンカレー開発の取組があり、ムスリム学生たちも協力した。

【障害を抱える留学生への支援プログラム】

- ・茶道講座 (全2回, 前期):障害を抱える留学生のための適応援助のため
- ・エクササイズプログラム (全8回, 前期):障害を抱える留学生のための適応援助のため
- ・障害を抱える留学生のための支援学生サポーターおよびファシリテーター養成研修:聴覚に障害のある講師による手話講座や介助犬による支援などについてレクチャーを行った。
- ・サポートグループミーティング:修学上の困難を感じている留学生同士が、各々の問題について互いに考え、解決への糸口を見つけるためのミーティングを実施した。

(3) 学生個別教育(相談)および診療

相談室での相談活動を「個別教育」と位置づけ、名古屋大学の留学生に限らず、在学生や他大学へ進学した学生、地域構成員などの相談にも可能な限り対応した。また、保健管理室において、精神科医による投薬を伴う精神科診療も行った。

相談対応は予約制としたが、予約のない時間でも在室中は適宜相談に対応した。電子メールでの連絡もあり、様々な形や内容の相談を件数として数値化することが必ずしも適切とは言えないが、件数として数えた。

【相談件数】

次の表の通りである。一度の相談における内容が複数にまたがっている場合も少なくないが、その場合は主たる相談内容を選択している。そのため、件数は相談の実回数に相当する。電話やメールによる相談も件

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16		
	指導教員・研究室	日本語・学業・研究	在留	宿舍	奨学金・授業料	医療・健康	生活・異文化適応	就職・インターンシップ	進路・将来	家族	地域	人間関係	心身不調・メンタル	国際交流・学生活動	障害留学生修学支援	その他	月別合計	前年度実績
4月	4	3	0	2	0	2	1	1	2	1	2	2	20	19	1	2	62	
5月	11	5	0	2	0	3	5	0	0	3	0	10	37	21	0	0	97	
6月	8	12	0	1	0	1	10	0	1	1	1	9	38	27	0	1	110	
7月	13	7	0	2	0	1	6	0	2	0	0	7	30	12	1	1	82	
8月	6	5	0	1	0	1	5	1	3	0	0	4	33	3	0	1	63	
9月	2	9	0	1	0	2	2	0	2	0	0	3	13	8	0	1	43	33
10月	1	14	1	0	0	7	3	0	1	1	3	0	20	18	1	0	70	45
11月	4	13	0	1	0	2	4	1	1	0	1	6	46	26	2	1	108	49
12月	1	8	0	2	0	0	2	1	2	0	0	7	35	16	0	1	75	85
1月	0	13	1	4	4	1	4	0	3	3	1	12	26	21	0	2	95	47
2月	1	7	1	2	0	0	4	0	2	1	0	9	24	23	0	2	76	32
3月	2	8	0	12	7	0	2	1	4	2	1	1	23	8	0	0	71	32
合計	53	104	3	30	11	20	48	5	23	12	9	70	345	202	5	12	952	

数に含めている。また、表の件数はアドバイジング・カウンセリング室の相談件数である。

2015年度の9月から3月までの件数（2015年度は9月から件数の集計を開始している）と2016年度の9月から3月の件数を比較すると、約1.79倍と顕著な相談件数の増加がみられる。増加の要因として、オリエンテーションでの情報提供、および留学生同士の情報共有などにより、アドバイジング・カウンセリング室が留学生に広く周知されていることが想定される。実際に教職員からのリファーマよりも、留学生の自発的な来室が増えている。

相談内容においては「心身不調・メンタル」「国際交流・学生活動」「日本語・学業・研究」の順に件数が多い。2015年度は9月から3月までの集計と比べて、相談内容の傾向は昨年度と同様である。アドバイジング・カウンセリング室として、留学生のヘカウンセリングおよび精神科診療、国際交流活動の促進、留学生へのアドバイジングの3つが活動の柱となっていると言えるであろう。

月別の相談件数においては、全体的に開講期間に多く、休暇期間は少ない傾向がみられる。これは、長期

休暇中には留学生が旅行したり母国に帰国したりすること、また休暇中に学業や研究の相談の頻度が減少することを反映している。また、特に6月と11月の相談件数が多く、学期が始まって2ヶ月ほど経つと様々な問題が露見しやすくなることが反映されていると考えられる。

【相談内容】

様々な相談の詳細およびその背景については、相談者のプライバシー保護の観点から、報告することができない例が多いが、今年度の特徴として以下を報告し、今後の活動に活かしていきたい。

■指導教員・研究室

研究室での人間関係について、疑問や悩みが寄せられた。所属部局の国際化推進教員や学内外関連機関と適宜協力しながら、疑問の払拭や問題の解決にあたった。また、留学生の指導教員等から学生対応について相談を受けることもあった。

学生へは、疑問に感じるがあったら問題化しないうちに相談できる場所があることを、オリエンテー

ションや日々の活動の中で周知し、教員へは、教員が自ずと持つ強い立場を理解し、学生への言動に自覚的になることを促している。

■日本語・学業・研究

研究指導の受け方についての相談があった。教員との面会約束の取り方、論文指導の受け方等、出身国などで慣れて来た方法がそのまま通用しないこともあり、一緒に考えた。学生の希望で、相談員も一緒に指導教員と相談するというケースもあった。

学部生との相談においては、アカデミックスキルを高めるための相談も多かった。タイムマネジメント、学期末のテスト準備方法、実験チームにおけるコミュニケーションの取り方等、学生と共に検討しながら相談を進めた。

■在留

家族呼び寄せのための相談の中で、急を要する書類の翻訳を依頼されて対応したり、部局からの留学生の在留関係の相談に、この分野に詳しい教職員とともに応じたりした。

■宿舎

改装直後のアパートに転居したところ塗料等の臭いで体調を崩した学生についての相談があった。関係部署が交渉等を行ったが、当該学生の時間的精神的負担を考え、取り急ぎ他の場所に引っ越せるよう経済的支援をした。国際交流会館の維持管理、衛生面での問題があり、ゴキブリ駆除や清掃の仕方について、関係部署と連絡しながら解決策を検討・実施した。大幸地区に国際学生会館が建設されることになり、その設計や運営についての相談に、関係部署と協力しながら対応した。

■医療・健康

持病のために留学前より処方薬を服用していた学生が、国による認可薬の違いのため日本で同じ薬剤が手に入らず、病状を悪化させてしまったケースがあった。そのため、短期交換プログラム(NUPACE)においては、留学前に服用薬を確認し、日本では認可されていない薬剤を服用している場合、可能なかぎり渡日前に日本で処方可能な薬剤に変更しておくよう通知を作成し、事前に配布した。特に注意欠陥・多動性障害

(ADHD)に対して海外で用いられている一部の薬剤は、日本では覚せい剤取締法の対象となる可能性があるため、注意が必要であった。

また、日常生活を送るにあたり、学生たちから飲料水を学内で無料提供できないか相談があり、保健管理室や大学生協、図書館等に相談した。トイレのシンク水道水は衛生上飲料水として問題がないが、学生たちは飲むことに抵抗があり、ペットボトル水を購入すると特に夏場は一ヶ月5000円以上の出費になる。大学生協の尽力で、学内で安価に飲料水を入手できる方法を導入した。しかし十分ではないため、今後も対策を考えることになった。

■生活・異文化適応

毎日の生活に欠かせない食事や、礼拝の場所について、ムスリム学生やベジタリアン、関係機関や教職員からの相談があった。留学生の生活や宗教に関わるマスコミからの取材依頼もあるが、丁寧な報道を期待するのが難しい場合には、大学としては応じないようにしている。

■進路

研究の方向性を変えるほうがよいか、継続して研究生活を続けるべきか、休学や退学をしたほうがよいか、など進路に関する相談があった。就職の可能性についてはキャリア支援室と連携して対応した。

■地域

地域の組織や個人から、留学生と交流したい、留学生を招待したい、または留学生に日本文化を伝えたい、という希望が多く寄せられる。教育機関・公的機関からの依頼については地域連携・貢献の一環として部門で対応した。交流場所について国際棟を利用することを希望している団体もあるが、継続的な利用については今後の授業や研修の動向を見ながら判断することになっている。今年度は名古屋大学が後援するNHKによる地域活性イベント・番組「あいチーズ」が開催・収録され、多くの名古屋大学留学生が協力した。愛知県の魅力を留学生の視点から伝え、地域市民との交流が促されるようイベント企画に協力した。

■心身不調・メンタル

相談内容の多くはプライバシーに関わるため記載で

きないが、精神的不調により、日本の医療機関に入院となったケースや留学を中断して母国に帰国して治療を受けなければならなくなったケースがあり、それぞれ診療、カウンセリングや環境調整を行った。不調により一時帰国して回復したのちに、留学を再開し、以後順調な経過をたどるケースもあった。

■国際交流・学生活動

名古屋大学留学生会（NUFSA）、名古屋大学イスラム文化会（ICANU）、中国留学生学友会、異文化交流サークル（ACE）等からの相談があった。会が主催する行事についての相談、教室や運動施設利用にあたっての申請や連絡、コミュニケーションや日々の礼拝についてなどである。その他、名古屋大学で活躍している様々な国際交流活動グループからの相談に応じた。学生グループの活動を通して名古屋大学の国際化に貢献した学生たちを、国際教育交流センター長顕彰や総長顕彰に推薦し受賞を促した。

■交流活動

パートナーシップ、ホームステイ、コーヒーアワー、ワークショップ等の参加登録などで相談室を訪れる学生たちもいる。その機会に、交流や留学、外国語学習についての相談を受けることもある。様々な交流プログラムを紹介したり、言語を臆することなく積極的に使って実力をつけるよう助言したりしている。さらに部門として、ドイツ語の会の開催支援を行っている。

■障害学生修学支援

前期には障害のある学生1名に対して、チュータリングへの同席などの支援を行った。後期には身体に障害のある留学生の受入れがあり、渡日前の情報収集を行い、寮から大学までの移動方法について検討した。また、渡日後は日本の障害者手帳取得のための受診付添いや手続きの援助を行った。定期的なクリニック受診を要し、その都度付き添った。

■その他

学内にナチスのマークと日本軍のマークを組み合わせたような模様の紙切れが百数十枚撒かれていたという知らせがあり、学内の環境安全支援課に報告のうえ対応した。海外の大学でも、壁やグッズへのナチスマークや差別的表現の書き込みが報告されており、本

学でも注視していく必要がある。

税金・国民年金掛け金等について、質問や相談が寄せられることが多くあったが、内容が複雑、かつ多岐に渡るため、対応に苦慮するとともに、十分な情報提供ができていないという状況があった。市民としての権利や義務に関わり学生にとっても重要事項であるため、今年度は、初の試みとして、名古屋税理士会の協力の元、「留学生のための確定申告セミナー」を実施した。税金や確定申告についての説明会を行うとともに、税理士による個別相談会を行った。

(4) 授業

継続開講授業として、日本の伝統文化を学び英語を使って発信する基礎セミナーを教養教育院において開講した。一部の授業を公開し、本センターの日本文化を学ぶワークショップとの連携講座として、全学の留学生やケンブリッジ大学短期交換留学生の参加も得た。また、大学院国際言語文化研究科の「多文化コミュニケーション論」の授業が14年目となり、多文化チームで授業を進めた。今年度は昨年度に続いて授業は後期（b）だけの開講とした。さらに前期に、G30教養科目「Exploration of Japan: From the Outside Looking Inside」（高木、中島）、後期の全学教養科目「留学生と日本—異文化を通しての日本理解—」を国際機構教員チーム（渡部、中島、浮葉、高木）により開講した。

今年度の新しい取り組みとして、アドバイジング部門教員（田中、高木、酒井、和田）で、ボランティア活動に関する基礎セミナーを開講した。多くのゲストスピーカーを招き、幅広いボランティア活動について学ぶことのできる機会を作った。実際に学生自身がボランティアを体験し検討できるようカリキュラムを組んだ。また、総合保健体育科学センターと共同で、後期にG30教養科目「Health and Sports」（酒井）を担当し、精神衛生教育を行った。

3. 大学国際化への貢献

(1) 大学主催研修会等への貢献

4月には、新任教員研修のポスターセッションでアドバイジング部門の紹介を行った。5月には、高等教育研究センターと共催で、招聘セミナーを開催し、立命館大学から堀江未来氏（国際教育推進機構准教授）を招き、「多文化間共修の挑戦：多様な文化背景の大学生

のいる授業でどのように学び合いを促進するか？」について検討した。11月には、立命館大学から山口洋典氏（サービスマーケティングセンター准教授）を招き、「参加型学習のシステムとスタイル：ボランティア活動やサービスマーケティングをベースに」について、教職員だけではなく基礎セミナーにおいてボランティア活動について学んでいる学生たちも交えて検討した。

12月から2月にかけて、全3回で「医療通訳入門セミナー」を開催した。外部講師として医療通訳ネットワーク東海の伊藤美保氏、および名古屋外国語大学の浅野輝子氏を招聘し、留学生の医療機関受診付添いの際に必要となる、医療通訳の知識と技能の習得を目的とした。

（2）民間留学生寮入居希望者面接

留学生のために寮を提供している会社や団体が複数あり、入居希望者の面接を教育交流部門の教員や学生支援課の担当者とともに行った。条件のよい寮へは、大学からの推薦可能定員を大きく上回る数の申請があるが、国籍の多様性や日本語運用能力の面で提供側の希望と申請者の条件が合致しないこともある。本学の状況を提供団体に伝えながら、必要性の高い学生たちが入居できるように配慮している。今年度初めての試みとして、本学からの推薦者の一部に対して、提供団体で面接を受ける前に、本学で面接練習を行った。

（3）国際交流会館レジデント・アシスタント研修

インターナショナル東山・山手・妙見と留学生会館、および猪高宿舎には合計約20名の学生レジデント・アシスタント（RA）がおり、入居者の生活支援や会館運営の補助を行っている。アドバイジング部門と教育交流部門とでRAを対象とした研修を行っているが、本年度は内容をさらに充実させるべく、年間で6回の研修および連絡会を実施した。研修時には、現状の課題や問題となっている事柄について議論する場も設けられた。

3月には、来年度の新規RAの初期研修を兼ねた研修会を実施し、異文化適応の過程や異文化交流への理解を深めるためのセミナー、居住者に対する支援のコツ等、基本的な知識の導入を行うとともに、名古屋大学の留学生の特徴を知ってもらうため、各プログラムのパンフレットを配布、説明を行った。その際、G30やNUPACE担当教員にも参加頂き、プログラムにつ

いて直接説明を頂いた。さらに、保健管理室長から、保健管理室の利用について、および、日本の医療制度についての説明も頂き、他部門との連携構築を心がけ、包括的な視点からの研修が行えるよう試みた。新RA面接、研修時には、現RAにも参加を依頼。現場からの視点で業務内容や、業務への取り組み方について説明、情報交換の機会を設け、より現場に即した内容となるよう配慮した。今後海外留学説明会などの機会を利用しながらRAの存在を広く伝え、研修内容を充実させ、業務内容をより明確にすることで、教育的価値を高めていく予定である。

（4）国際学生寮新設への協力・寮内教育の検討

平成31年（2019年）度に名古屋大学に新たな国際学生寮が建設される予定であるため、設計の段階から現場の意見が反映できるよう、検討会を設置し、関係部署に提案等を行った。寮内での共修体制についても検討を始めた。

（5）大学生協におけるベジタリアン食提供への準備

学内構成員の食の多様性に対応するため、教育交流部門とともに昨年度留学生支援事業費によって大学生協と連携して行ったベジタリアン食提供事業が進み、本年度5月からベジタリアンメニューの提供が始まった。学生たちの協力によってベジタリアンカレーの開発も進み、10月からはカレーの提供および販売が始まった。留学生の中にはベジタリアンが少なからずおり、短期留学生受入においても、ベジタリアン食の有無を予め尋ねられることが多い。また日本人学生や教職員にもベジタリアンや野菜中心の食事をとる人もいるため、ベジタリアン食提供は、食の多様性に対する本学での取組みの大きな前進となった。

4. 地域社会と留学生の交流への貢献

（1）国際理解教育への留学生派遣

合計23件の地域組織等主催行事について、連携・協力し、アドバイジング部門を通して派遣した留学生数は75名であった。大学として責任を持って学生に紹介するため、基本的には教育機関と公的機関に限定して協力した。

平成28(2016)年度 地域社会と留学生の交流(アドバイジング部門による地域連携・貢献活動)

No.	年月日	行事名	依頼団体/依頼者	派遣数	備考(学生出身国と人数)
1	2016/5/15	春の国際交流会	揚輝荘の会	20	催行者へ直接応募
2	2016/7/23, 30	公民館講座「外国を知る」	大府市立長草公民館	1	香港1名
3	2016/6/7, 6/21, 7/6, 10/11, 10/25, 12/13, 1/24, 2/7	韓国についての学習	愛知県立旭丘高等学校	3×8	催行者へ直接応募
4	2016/8/9-12	高山グローバルサマーフェスタ	愛知県立旭丘高等学校	6	催行者へ直接応募
5	2016/6/12	カンボジアについての学習	岐阜市夢プロジェクト実行委員会	1(講師) 4(交流)	催行者へ直接応募
6	2016/6/18	International Party	愛知県立千種高等学校		催行者へ直接応募
7	2016/9/8	文化祭でのプレゼンテーション	愛知県立一宮西高等学校	1	催行者へ直接応募
8	2016/7/2-15	合唱コンクールのためのハンガリー語指導	桜花学園高等学校	1	ハンガリー1名
9	2016/8/25-9/1	あかのみあふじやま	都留文科大学	2	催行者へ直接応募
10	2016/10/31	グローバルカフェ	愛知県立豊田南高等学校	9	インドネシア1名, ウズベキスタン1名, 中国2名, ベトナム3名, レソト1名, ベナン1名
11	2016/8/9-13 2016/8/27-31	イングリッシュキャンプ in あいち	愛知県教育委員会(インタラク)		催行者へ直接応募
12	2016/11/12	留学生交流ツアー	名古屋を明るくする会	30	中国25名, ベトナム4名, 米国1名
13	2016/12/10	International Party	愛知県立千種高等学校		催行者へ直接応募
14	2017/1/20, 1/27, 2/3, 2/10	国際交流LT	愛知県立旭丘高等学校	16	催行者へ直接応募
15	2017/1/12, 1/13, 1/18	SG 総合	愛知県立旭丘高等学校	48	催行者へ直接応募
16	2016/11/12	秋の国際交流会	揚輝荘の会		催行者へ直接応募
17	2016/12/23-27	イングリッシュキャンプ in あいち	愛知県教育委員会(インタラク)		催行者へ直接応募
18	2016/12/26-27	イングリッシュキャンプ in 三重	三重県教育委員会		催行者へ直接応募
19	2017/1/15	国際交流デー	大府市国際交流協会	7	インド1名, インドネシア1名, エジプト1名, 台湾1名, ドイツ1名, パキスタン1名, 香港1名
20	2017/1/21	新春留学生交流懇親会	名古屋を明るくする会	20	米国1名, インド1名, インドネシア1名, エジプト1名, カンボジア1名, コスタリカ1名, ドイツ1名, パキスタン1名, バングラデッシュ1名, フィリピン1名, ベトナム3名, マリ1名, マレーシア1名, モンゴル2名, 中国3名
21	2017/1/27	自国の遊びについて	名古屋市立伊勝小学校	7	ベトナム1名, ウズベキスタン1名, モンゴル1名, 中国4名
22	2017/3/20	ここから始める異文化交流	近畿日本ツーリスト	4	催行者へ直接応募
23	2017/3/29-31	中学生と英語で交流 @ 名古屋大学	トモノカイ	2	催行者へ直接応募 ウズベキスタン1名, 韓国1名

行事数: 23

依頼団体数: 15

派遣留学生数: 延べ75名(催行者への直接応募を除く)

参加者の出身国・地域: 21ヵ国・地域(催行者への直接応募を除く)

(2) ホームステイ

アドバイジング部門では、留学生と地域とを結ぶホームステイ事業に取り組んでいる。今年度は宿泊を伴わない「ホームビジット」プログラムも含めて、年

間5回の主催プログラムと7回の協力プログラムに合計140名の留学生が参加した。昨年度まで連携してプログラムを運営していたヒッポファミリークラブは管理料徴収が必要になったため、独自にプログラム展開

をすることになり、アドバイジング部門では案内の掲示に協力した。(詳細については本年報, 事業報告編の「地球家族プログラム」を参照)。

(3) 地域連絡会・留学生のためのバザー

本年度も地域連絡会を年に4回開催し、名古屋大学留学生会 (NUFSA)、異文化交流サークル ACE、YWCA、ともだち会、地域のボランティアの方々と、留学生のためのバザーを計画し、4月と10月に開催した。1986年10月に始まった留学生のためのバザーは、今年度で30周年を迎え、60回目を終えることができた。渡日直後やアパートで生活を始めた留学生にとって生活用品を安い価格で購入することのできる機会であり重宝されている。年々、バザーの提供品が減少傾向にあり、どのように提供品を募っていくか課題となっているが、新聞に掲載することや過去の提供者への情報提供等を通して、幅広い方たちに周知が行き届くよう工夫している。留学生のためのバザーは、品物を購入する学生たちだけがメリットを得る場ではなく、バザー運営のために関わる学生たちが、留学生の生活上のニーズを把握したり、より良いバザー作りのために運営方法を改善したり、地域のボランティアの方々と交流できる機会になっており、教育的な交流の場となっている。

(4) 警察との連携

名古屋大学が位置する千種区の警察署には、従来様々な形で学生たちへの安全指導に協力してもらっており、特に新入留学生が、日本の「安全神話」を過度に信じて犯罪にまきこまれることがないように、これまでの経験も参考にしながらオリエンテーションなどで指導している。また学生集会などが他人によって思わぬ方向に利用されないよう、地域の安全を守るためにも、学生グループとも連携協力している。

5. 研究・研修

(1) 著書・論文・報告

・田中京子「留学生と大学の国際化～留学生相談担当者の視点から～」『名古屋大学国際教育交流センター紀要』第3号、名古屋大学国際教育交流センター
 ・高木ひとみ「学びを深める多文化間グループアプローチ:名古屋大学の正課内外における実践」『多文化

間共修』坂本利子・堀江未来・米澤由香子(編)学文社

・渡部留美・城所佑委・岩城奈巳・高木ひとみ・孝森めぐみ・田中京子・浅川晃広・酒井崇・坂井伸彰・和田尚子『国際交流担当者のためのガイドブック』名古屋大学国際教育交流センター、2017年2月

・酒井崇「適応することと潜勢力としての思考」『現代思想』44(17)、138-149、2016

・酒井崇「学会印象記 Convegno internazionale sul ritiro sociale in adolescenza (国際青年期社会的ひきこもり学会) —2016年1月29-30日 Milano にて—」『臨床精神病理』37(1)、79-85、2016

・酒井崇「海外文献抄録 Psychoanalysis in the age of bewilderment: On the return of the oppressed 困惑の時代における精神分析—弾圧されたものの帰還—Christopher Bollas」『精神療法』42(4)、141-148、2016

・和田尚子「海外文献抄録 分析的過程における誠実な信頼 (F) と現存の瞬間 (O): 自己愛性障害の一例 Bernd Nissen」『精神療法』42(4)、141-148、2016

(2) 学会発表

・田中京子 2017年3月10日 留学生教育学会 担当教職員分科会 講演「対話を通して進めるキャンパスの多文化環境整備～名古屋大学の25年を振り返り、繋ぐ」

・酒井崇 2016年7月28-29日 全国大学保健管理研究集会 第54回東海北陸地方部会研究集会 シンポジウム「留学生のメンタルヘルスについて」

・酒井崇 2017年2月3日 平成28年度第2回国立大学法人留学生指導研究協議会 (COISAN) 講演「障害のある留学生の受入対応 —真の Inclusion の実現を目指して—」

(3) 学会活動

・国立大学法人留学生指導研究協議会 (COISAN) 編集委員 (酒井, 和田)

・異文化間教育学会 編集委員 (田中)

・国立大学法人留学生指導研究協議会 (COISAN) 研究班 (高木)

(4) 研究活動

・2017年2月3日 平成28年度国立大学法人留学生指

導研究協議会 兼 第46回大阪大学留学生教育・支援協議会 分科会「障害を持つ留学生への支援」ファシリテーター

・2017年2月4日 国立大学法人留学生指導研究協議会 (COISAN) 第5回留学生交流・指導研究会ケースカンファレンス・コメンテーター (大阪大学・酒井)

(5) 研究助成

・日本学術振興会科学研究費補助金 基盤研究 (C) 「日本留学の長期的成果～グローバル展開と次世代への波及」2014～2016年 (田中)

・日本学術振興会科学研究費補助金 若手研究 (B) 「大学院留学生のための多文化間調整能力を高めるための教育プログラムの開発」2014年～2017年 (高木)

(6) FD・SD活動

・2016年5月25日 名古屋大学高等教育研究センター「多文化共修の挑戦～多様な文化背景の大学生のいる授業で、どのように学び合いを促進するか?～」参加 (田中, 高木, 酒井, 和田)

・2016年5月29～6月4日 NAFSA (Association for International Educators) デンバー大会参加 (高木)

・2016年8月1日 国際比較文化心理学会大会 International Association for Cross-Cultural Psychology 参加 (名古屋市・高木)

・2017年9月17日 異文化コミュニケーション学会大会参加 (名古屋外国語大学・高木)

・2017年2月10日 名古屋大学国際言語文化研究科「アジア留学生白書～留学生フォトヴォイス研究から見えるもの～」ラウンドテーブル参加 (田中, 高木, 酒井)

・2017年1月27日 アクアリング他「インバウンド名古屋セミナー」参加 (田中)

・2016年10月1～2日 第23回多文化間精神医学会参加 (酒井)

・2016年10月7～8日 第39回日本精神病理学会参加 (酒井, 和田)

・2017年12月11日 第16回河合臨床哲学シンポジウム「人稱—その成立とゆらぎ」参加 (和田)

・2017年1月28～29日 精神病理コロック2016/2017

参加 (酒井, 和田)

・2017年2月3～4日 国立大学法人留学生指導研究協議会, COISAN20周年記念シンポジウム, 研究会出席 (大阪大学, 田中, 高木, 酒井, 和田)

・東山症例検討会 (保健管理室, 毎月開催) 出席 (高木, 酒井, 和田)

6. 社会連携

(1) 研修・講座講師

・2016年9月2日～4日 BRIDGE「国際教育の理論と実践を学ぶワークショップ」(立命館大学・高木)

・2017年1月11日 「学習者の学びを促す仕組みづくり: 海外研修・国際教育に携わるときの教育者の役割」(JTB・高木)

(2) 国際交流関係財団等の委員

・コジマ財団 評議員 (田中)

・愛知留学生会後援会 常任理事, 緊急援助金担当 (田中)

・愛知県国際交流協会 評議員 (田中)

・大幸財団 選考委員 (田中)

7. おわりに

2016年度は、前年度に行われた改編等の変化を受け止め、これまでの活動を継承しつつ、それぞれの活動内容の進展を目指した一年であったと言える。国際交流活動の充実化を目指すとともに、それぞれの専門性を活かして、様々な内容、方向性、レベルの相談に応じた。他部門との連携を大切にしつつ、包括的な体制構築に向け良い発進ができたと言えよう。

今後も、国際学生増加に伴うニーズの多様化に応えるべく、常に新しい目を持ち日々の相談・業務に取り組み、大学における国際交流・支援体制の深化を目指していきたい。異なった背景を持つ人々が、様々な悩みを抱えつつも、周囲との交流を深め、その能力を最大限に発揮し、今後の成長、活躍へとつながっていくような環境整備に貢献していく所存である。